

## 口は健康のもと Vol.82 口の中の「がん」その3

### 進行がんで発見、7割以上

口腔がんは大きさや深さ、転移の状態で4段階に分類されます。

早期発見といわれるのが第1段階ですが、その前の段階に「前がん状態」や「前がん病変」というものもあります。

一方「進行がん」は第4段階ですが、口腔がんの中には「前がん状態」や「前がん病変」に似た症状から、わずか1か月で「進行がん」になったケースがあります。

早期の口腔がんは、炎症とほとんど見分けがつきません。歯茎の炎症や歯槽膿漏は初期の歯肉がんにそっくりです。また口内炎や粘膜のただれは、口腔がんによくみられる症状です。

最も多いのは「舌がん」ですが、そのほかにも舌の裏側にできる「口腔底がん」、歯茎にできる「歯肉がん」、頬の粘膜にできる「頬粘膜がん」、上あごの天井にできる「口蓋がん」などがあります。

ほとんどが病理学的には「扁平上皮がん」というもので、皮膚や粘膜を作っている組織と同じものからできています。

毎年約8000人が発症し、半数が亡くなっています。口の中は自分で見ることができます。早期発見できれば食べたり話したりする機能をほとんど失うことなく治ります。しかし現状は7割以上が「進行がん」になってから発見されています。少しでも気になったら、気軽にご相談下さい。



奥羽大学歯学部附属病院  
口腔外科 教授 高田 訓

